地球のまわる音にあわせて

twnovel おりほん
6
〜ネコ編〜

猫は歌うあらゆる夜の街角で
地球のまわる音に合わせて

この内容は、suwazo が 2010 年 2 月〜2013 年 6 月にかけて twitter で呟いた twnovel（※140 文字、ただしタグを除けば 131 文字の小説）のうちの 11 本に、新作を 1 本加えたものです。
suwazo@twitter
2013 年 6 月

お 前達は私を箱の中に閉じ込めた。ニャア。お前達は私をシュレディンガーの猫と呼ぶ。好きに呼ぶがいい。私は何も気にしない。だが、お前達が私をシュレディンガーの猫と呼ぶときゃ、私もまたお前達をシュレディンガーの子らと呼ぶ。私にとっては、お前達こそが巨大な箱の中に在る。

か 猫を買いにゆく。大きなコップを持ってゆく。「水猫、ください」無表情に帳面をつけていたショップのお兄さんは、物憂げに立ち上がり、ポットからコップに水猫を注ぎはじめる。とぽぽ。とぽぽ。コップの中で幼い水猫がはしゃぎはじめる。「名前は決めてる？」とお兄さんが問う。

き わくを跨いで登った屋根の上、月はおぼろに西の空、あちらの窓の明かりが消えて、こちらの窓の明かりも消えて、夜はますますしんとなり、昨日のひるまの記憶をなくし、ヒゲは大地をシッポは空を、それぞれ指して、猫はゆく。

く しくも「おさわりOK」の野良猫として人々に愛されたトラは、寿命をまっとうしたあと猫なから三途の川に巡りつき、そこでスカウトされた。世に未練を残す猫好きの死者たちに最後のひと撫でをさせてやる任務についたのである。奏衣後の隊で、トラはフンと得意気である。

け テルの一宝。少し緊張しながら出張モフモフに電話を入れた。「どんな子がお好みで？」「あの、見毛種で……色にはこだわりはないです」「血統書つきの子だと割増金になりますが」「いや、むしろ雑種の子のおが」マタタビと高級猫缶を用意し、きどきしながらその子の訪れを待つ。

こ の前に死神が現れたとき、王は呪術師を雇って死神を白猫に変え、裏町に捨てた。尽い年月がたって今や孫が死んでも王は生き続けた。やがてひ孫の反乱により、王は夕食回然の姿で裏町に捨てられる。半ば狂った彼の前に現れた、白猫。逃げる白猫を彼は愛える足で追いはじめる。

さ 間には内緒のこと。地球上に猫は一匹しかいない。地球上のすべての猫は同じひとつの魂を共有している。したがって『私たち』猫族はただの一匹の『私』でしかない。遠い昔、『私』はこの星にやってきた。やわらかな陽射しを浴びてうらかに昼寝するために。

し ラゴンの血一滴で百年の寿命を得られるという。王のために捕獲された仔ドラゴンの檻に、鍵をくわえた黒猫が現れる。「おじちゃん、懐かしい匂いがする」「ったく、デメエの鈴ィのせいで俺ァもう三百歳ニャー」「？」その夜、黒猫を乗せた仔ドラゴンが城の塔をぶっ壊して飛び立つ。

す の島に段ボール箱が流れ着く。箱には『誰か拾って下さい』と日本語で書いてある。浜辺で少女が拾う。正確にはその中の小さな仔猫を。少女は日本語など読めない。日本の小川に流された段ボール箱がこんな遠い南の海にたどり着く等がない。けれど確かに、少女は、仔猫を抱き上げる。

せ 球に降り立った宇宙人を、老婦人は温かくもてなす。老婦人の１ダースの飼い猫が宇宙人の足元を駆け回る。膝にのって甘える。これは！膝だった。宇宙人が言う。「私の星へ来ますカ？」老婦人は地球最後の人類だった。「いいえ。でもこの猫たちを運れていってあげて下さらないかしら」

そ 宙人が１ダースの猫を連れて行ってから三日。老婦人は自分のためにお茶を淹れる。なんて、なんて静かなのだろう。そう思った宇宙船から降りてくる宇宙人と猫たち。「猫が沸しがっテ鳴くのデ」と宇宙人。「それに有休が溜まってたのデ」年単位の有休が。